

2月22日に行われた佐渡米生産者大会では、金田名誉教授から「根の重要性を土壌学的立場、作業のポイント」についてご教授いただきました。最後のまとめとして『現場力』を高めることの重要性をお話頂きました。

『現場力』

1. 作物体や根を観察して健康状態を判断する『見て判断する力』
2. 土壌の硬さや団粒構造など土に触り判断する『触って判断する力』
3. 気象情報から気象が作物に及ぼす影響を予測し対応する『予測する力』を身に付けること。

そのためには

- ①とにかく観察すること ②記録すること ③お互いに見合う(情報共有・議論・探求する)こと

この3つが大切になります。

ある日……



Aさん

」A佐渡広報誌の水稻情報…

そうそう、11月号(令和5年の後遺症) 12月号(令和6年を振り返って)覚えてるかい？

なんか書いてあったなあ。それにしても、米づくりは、令和5年秋といい令和6年秋も今までに無い刈跡だったあ。秋の大雨続きで、稲が倒れて、晴れねえは、ぬかるむは、刈り取り後の田んぼに**水が溜まり・ヒコバエ(再生稲)が多発**したまま放置されてるわで、大変だったなあ。



Bさん



Cさん

オレが覚えてんのは**後遺症**って言葉だなあ。田んぼの漏水・不均平・暗渠なんかの配水体制の治療と、田植前までに可能な限り田んぼを乾かし、ヒコバエの分解を促進させる時間が必要なんだと書いてあってタメになったあ。今度の3月14日、15日の「営農フェア」で詳しく説明してくれるって聞いたよ。お前さんたちも、一緒に行こうじゃないか。

解説



調べてみるとアメダス地点以外の雨量計では8月26日から局地的にバケツをひっくり返した強い雨(ゲリラ豪雨)が降り、早期に倒伏が始まったこともわかって来ました。

令和6年は稲の大切な時期に日照不足とゲリラ豪雨で登熟停止・強制倒伏しヒコバエが多発しました。平常年のワラ量に加えてヒコバエが加わり、より多くの有機物が投入されて平常年と異なる田んぼとなっていました。

そして、温かい春を迎え、初期生育が遅れたスカスカの田んぼに太陽光が田面まで届き地温が一気に上昇しました。有機物は稲が吸えるチッソに分解され、下位節(下の方の節)が急伸長しました。この時点で倒伏へのスイッチが入ってしまったのです。

あわせて後遺症で漏水が続き用水も少なかったことから落水はおっかなびっくり怖く、その後の用水を気にしての中干しとなっていました。溝切りもままならずそのまま長雨を迎えてしまったのです。



Dさん

このままだとロータリーに引っからまってしまうので全部刈り倒してから秋起したわ。

すんげーな！俺はほったらかしてあるわ。春になんかしねえばならんと思っとったけど春の農協さんのイベント(春期営農フェア)で説明あるみたいだわ。行こっかな～話も聞きたいし。



Eさん



Fさん

酵素でワラを分解する商品があって、春に散布しても効果あるらしいって聞いたよ。まだうってねえけど、出来るだけ水尻排水良くして、撒く準備しておこうと思ってる。稲わら分解促進材はある程度低温でも水に浸かる迄の時間が1か月位あれば分解が進むんだとさ。早よう散布してしまおっと。

解説



JAでは「アグリ革命」「ワラ分解キング」「スーパーわらゴールド」を用意しております。低温下で耕起まで時間がない場合は「酵素剤」の「アグリ革命」をヒコバエに散布しワラ繊維を柔らかくしておくことがお勧めです。



ヒコバエ多発に！
アグリ革命！

- 秋耕が出来ず、ヒコバエや雑草が放置されて春を迎えた田んぼでは、**酵素の力を最大限に活かして、田植前までに少しでも分解を進めておきワキの発生を抑え・還元による温室効果ガスの発生を削減することが大切です。**

秋田県立大の金田名誉教授から教えてもらった『現場力』を活かして、後遺症なく平常年の田んぼAと、漏水や均平が取れてない田んぼBを識別して、下記の作業計画例を参考に令和7年はV字回復を目指しましょう。

A：後遺症なし(特に漏水なく、水尻閉めて1日に2～3cm水位が下がる程度)

B：2年続けて除草剤が効かない。収量・品質低下。漏水なのに秋は水が溜まって収穫困難。秋耕できず。

◎表面水排水を促し、すぐに稲わら分解酵素剤「アグリ革命」を散布し、可能な限り水に浸かるまでの時間を稼ぎましょう。

